

日本英文学会九州支部第 76 回大会

期日 2023 年（令和 5 年）
10 月 14 日（土）・15 日（日）

場所 宮崎大学木花キャンパス
（宮崎市学園木花台西 1 丁目 1 番地）

日本英文学会九州支部

〒890-0065 鹿児島市郡元一丁目 21 番 30 号

鹿児島大学法文学部

竹内勝徳研究室内

TEL (099) 285-8874

E-mail: elsj.kyushu.branch@gmail.com

HP: <http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp>

2023-25 年度 日本英文学会 九州支部 理事一覽

秋好 礼子 (福岡大学)
井石 哲也 (福岡大学)
鵜飼 信光 (九州大学)
大島 由起子 (福岡大学)
大橋 浩 (九州大学)
加藤 洋介 (西南学院大学)
後藤 美映 (福岡教育大学)
小林 潤司 (鹿児島国際大学)
高野 泰志 (九州大学)
竹内 勝徳 (鹿児島大学)
西岡 宣明 (九州大学)
福田 稔 (宮崎公立大学)
前田 雅子 (九州大学)
松元 浩一 (長崎大学)
山田 英二 (福岡大学)

2023 年度 日本英文学会 九州支部 事務局員一覽

支部長・日本英文学会理事	竹内 勝徳
副支部長	小林 潤司
『九州英文学研究』編集委員長	後藤 美映
事務局長	大和 高行
書記	末松 信子
書記	小林 朋子
書記	松下 紗耶
書記	高根 広大

2023 年度 日本英文学会九州支部第 76 回大会 開催校委員一覽

井崎 浩 (開催校責任者)、新名 桂子
開催協力校 (宮崎公立大学) 委員: 福田 稔、村上 幸太郎

宮崎大学 アクセスマップ

〒889-2192 宮崎市学園木花台西1丁目1番地

TEL 0985-58-7111

交通アクセス

宮崎までの交通アクセス

<p>■航空機</p> <p>東京 — 宮崎 (1時間45分)</p> <p>名古屋 — 宮崎 (80分)</p> <p>大阪 — 宮崎 (70分)</p> <p>福岡 — 宮崎 (40分)</p> <p>沖縄 — 宮崎 (80分)</p> <p>■高速バス</p> <p>福岡 — 宮崎 (4時間)</p> <p>熊本 — 宮崎 (3時間)</p> <p>鹿児島 — 宮崎 (2時間30分)</p>	<p>■JR (特色)</p> <p>博多 — 宮崎 (3時間45分)</p> <p>小倉 — 宮崎 (4時間)</p> <p>熊本 — 宮崎 (3時間)</p> <p>大分 — 宮崎 (3時間)</p> <p>鹿児島 — 宮崎 (2時間10分)</p> <p>長崎 — 宮崎 (5時間20分)</p> <p>大分 — 宮崎 (3時間20分)</p>
--	---

宮崎大学までの交通機関

<p>(JR南宮崎駅近く)</p> <p>宮交バス 「宮崎大学・大学病院」に乗車 → 約25分</p> <p>宮交バス 「宮崎大学・大学病院」に乗車 → 約40分</p> <p>宮崎駅 「宮崎大学・大学病院」に乗車 → 約37分</p> <p>宮崎駅 「宮崎大学・大学病院」に乗車 → 約43分</p> <p>宮交バス 「宮交シティ」行 → 約30分</p> <p>宮交バス 「宮崎大学・大学病院」に乗車 → 約25分</p> <p>JR清武駅 (徒歩2分) JR清武駅前バス停 → 宮交バス 「宮崎大学・大学病院」に乗車 → 約15分</p> <p>JR清武駅 (徒歩2分) JR清武駅前バス停 → 宮交バス 「宮崎大学・大学病院」に乗車 → 約15分</p> <p>※バスで清武キャンパスへ向かう際は、『大学病院前』で下車してください。</p> <p>宮崎空港 → タクシー → 宮崎大学まで約8km → 約15分</p> <p>宮崎自動車道・九州自動車道 → 清武インターチェンジから → 約15分</p>	
--	--

(ご注意)

- * 宮崎市内からは「宮崎駅西1番乗り場」か「宮交シティ」より以下の方面の宮崎交通バスに乗車されて「宮崎大学」で下車されてください。
 - ・宮崎交通バス 811 番線「木花台方面 宮崎大学・大学病院」行
宮崎駅西1番乗り場より約40分、宮交シティより約25分
 - ・宮崎交通バス 822 番線「まなび野方面 宮崎大学・大学病院」行
宮崎駅西1番乗り場より約50分、宮交シティより約35分
 - ・宮崎交通バス 832 番線「清武方面 宮崎大学・大学病院」行
宮崎駅西1番乗り場より約45分、宮交シティより約30分
 - ・宮崎交通バス 835 番線「清武方面 熊野経由宮崎大学・大学病院」行
宮崎駅西1番乗り場より約55分、宮交シティより約40分

発着時刻検索画面

<http://qbus.jp/cgi-bin/time/menu.exe?pwd=h/menu.pwd&mod=F&menu=F&area=45>

(このページの一番下に QR コードを提示しています。)

- * 車でお越しになる場合は、14日(土)、15日(日)ともに、教育学部棟北側駐車場をご利用ください。
- * 宿泊施設情報については、下記の日本英文学会九州支部のホームページをご覧ください。
<http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp> (下記に QR コードを提示しています。)



バス発着時刻検索画面 QR コード



日本英文学会九州支部ホームページ QR コード

宮崎大学木花キャンパスマップ

キャンパスマップ

宮崎大学には、学生のみなさんの可能性を広げる2つのキャンパスがあります。
木花キャンパスには教育学部・工学部・農学部・地域資源創成学部が、清武キャンパスには医学部があり、キャンパス間での交流も盛んです。



木花キャンパス

〒889-2192
宮崎県宮崎市学園木花台西1丁目1番地

農学部

- 1 実験研究棟(北)
- 2 講義棟
- 3 実験研究棟(南)
- 4 実験研究棟(獣医)
- 5 附属動物病院
- 6 附属農業博物館
- 7 標本植物温室
- 8 附属フィールド科学教育研究センター

教育学部

- 9 講義棟
- 10 実験研究棟
- 11 美術棟
- 12 技術・家庭棟
- 13 音楽棟
- 14 附属教育協働開発センター

地域資源創成学部

- 15 講義棟
- 16 実験研究棟

工学部

- 17 実験研究棟(A棟)
- 18 講義棟(B棟)
- 19 実験研究棟(C棟)
- 20 機械実習工場
- 21 機械工学実験実習棟
- 22 高電圧実験棟
- 23 土木工学実験実習棟
- 24 実験研究棟(E棟)
- 25 電気機器実験棟

太陽光発電システム・太陽熱給湯システム

- 26 ビームダウン式太陽集光装置
- 27 工学部実験研究棟屋上
- 28 産学・地域連携センター(機器分析支援施設)壁面
- 29 附属図書館屋上
- 30 国際交流宿舎屋上
- 31 集光型太陽光発電システム(NSCエネルギースクエア)(体育館北側)
- 32 教育学部技術・家庭棟屋上
- 33 教育学部実験研究棟屋上
- 34 農学部実験研究棟(北)屋上
- 35 農学部講義棟屋上

自然科学野外観察教材開発プロジェクト

- 36 木花キャンパスの地質の全体像
- 37 下末吉海進期以降の段丘堆積物
- 38 宮崎層群の砂岩泥岩互層
- 39 ナンパンギセル(ハマツボ科) 照葉樹林

- 40 福利施設棟(国際連携機構、学生食堂、インフォメーションコーナー)
- 41 附属図書館(本館)
- 42 創立330記念交流会館
- 43 地域デザイン棟
- 44 事務局棟(1F入試課)
- 45 安全衛生保健センター、障がい学生支援室
- 46 情報基盤センター
- 47 フロンティア科学総合研究センター(RI木花分室)
- 48 研究・産学地域連携推進施設(研究・産学地域連携推進機構)

- 49 創造プロジェクト棟
- 50 イスラム文化研究交流棟
- 51 研究・基盤支援施設(研究・産学地域連携推進機構)
- 52 フロンティア科学総合研究センター(遠伝資源分野)
- 53 総合研究棟
- 54 産業動物教育研究センター
- 55 国際交流宿舎
- 56 女子寄宿舎
- 57 男子寄宿舎
- 58 木花ドミトリー

2023年4月1日現在



宮崎大学キャンパスマップ



開催期間中の食事と懇親会について

*学内の食堂は10月14日(土)は営業しております(11:00~19:30)が、15日(日)は閉まっております。また、会場から徒歩8分くらいのところにコンビニエンス・ストアがあります。15日(日)の昼食はご準備いただくか、下記のフォームから事前にお弁当(お茶も込みで800円)を予約ください。また、14日(土)19時よりMRTmiccにて懇親会(一般会員6000円、学生会員4000円)を開催いたします。その参加についても同じフォームから申し込みください。締め切りは9月30日とさせていただきます。

<https://forms.gle/Brw8jJpi2kZ9PC4U6>



15日弁当と14日懇親会の予約QRコード

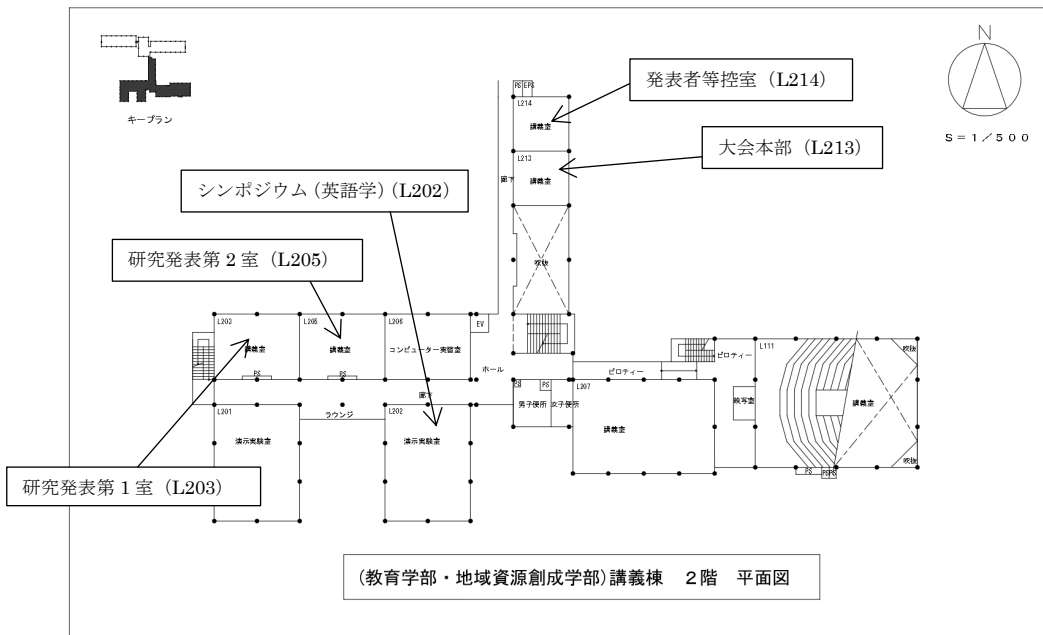
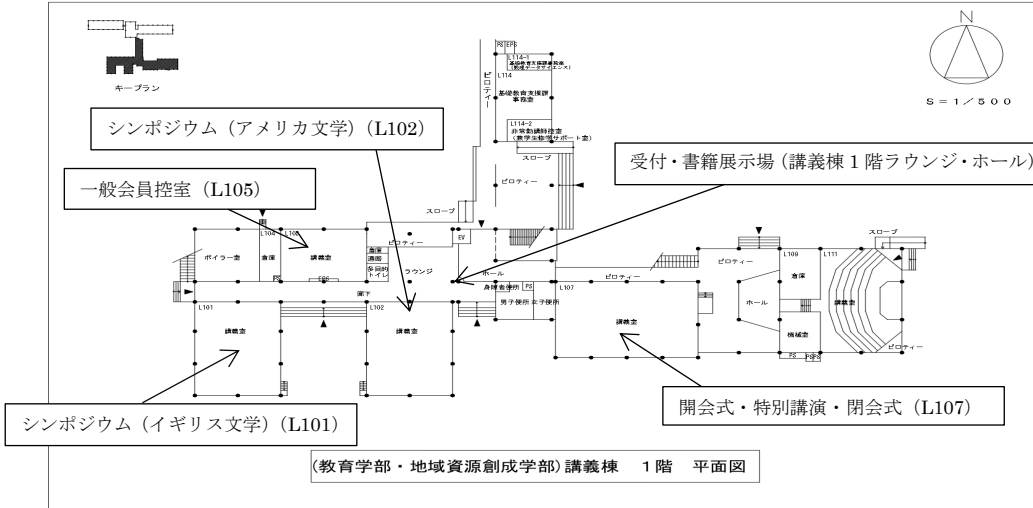
*お弁当の代金と懇親会の会費は会場の受付(講義棟1階ラウンジ・ホール)にてお支払いください。お弁当については15日(日)12時20分より同受付にてお渡しいたします。

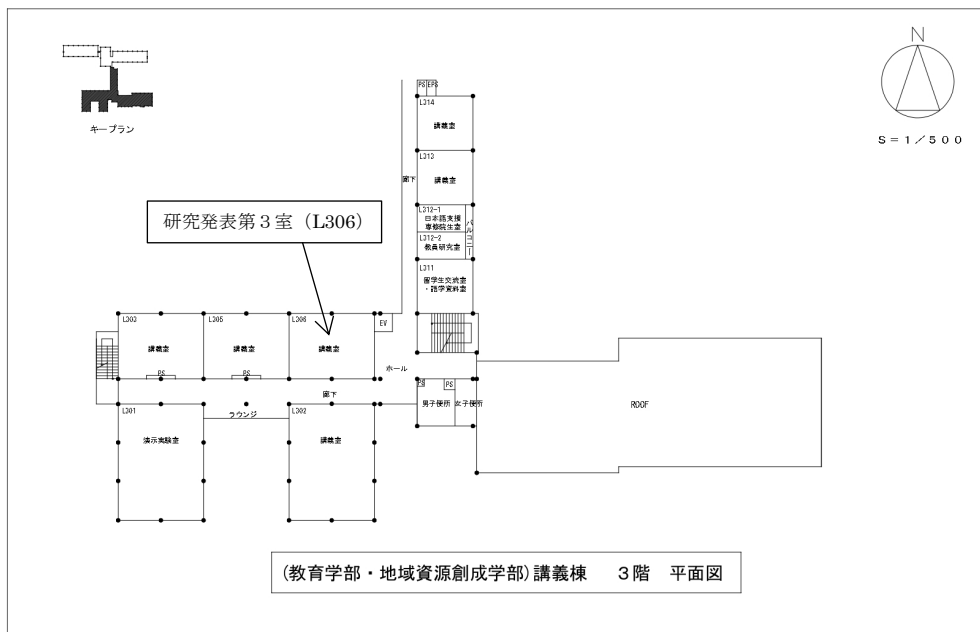
14日(土)懇親会送迎バスの運行

*14日(土)のプログラム終了後、17時45分に教育学部・地域資源創成学部前のバス停より貸切バスを運行いたします。懇親会に参加される方はご利用ください。懇親会に参加されない方も宮崎駅方面に

行かれる場合はご利用ください。

会場案内 (講義棟平面図)





- 大会本部 : L213 講義室
- 編集委員会、理事会・評議員会 : 実験研究棟 1階第2会議室
- 編集委員、理事・評議員控室 : 実験研究棟 1階第1会議室
- 受付・書籍展示場 : 講義棟 1階ラウンジ・ホール
- 開会式・特別講演・閉会式 : L107 講義室
- シンポジウム第1部門 (イギリス文学) : (L101 講義室)
- シンポジウム第2部門 (アメリカ文学) : (L102 講義室)
- シンポジウム第3部門 (英語学) : (L202 講義室)
- 研究発表第1室 : L203 講義室
- 研究発表第2室 : L205 講義室
- 研究発表第3室 : L306 講義室
- 発表者・司会者・シンポジウム講師控室 : L214 講義室
- 一般会員控室 : L105 講義室

懇親会会場

懇親会会場：MRTmicc (宮崎市橘通西 4 丁目 6 番 3 号 電話 0985-22-1111)

会費：一般会員 6000 円、学生会員 4000 円

予約と会費の支払い：本プログラム 5 頁の予約フォームあるいは QR コードから予約ください。締め切りは 9 月 30 日とさせていただきます。会費は会場の受付 (講義棟 1 階ラウンジ・ホール) にてお支払いください。なお、14 日 (土) のプログラム終了後、17 時 45 分に教育学部・地域資源創成学部前のバス停より貸切バスを運行いたします。懇親会に参加される方はご利用ください。



- ・ JR 宮崎駅西口から徒歩 10~15 分

【周辺バス停】

- ・ デパート前 ・ カリーノ宮崎前 ・ 野村證券前 ・ MRT 前 ・ 橘通 3 丁目

大会日程

10月14日(土)

開会式 (13時10分)

L107 講義室

研究発表 (①13時30分 ②14時10分)

第1室 (イギリス文学)

L203 講義室

第2室 (アメリカ文学)

L205 講義室

第3室 (英語学)

L306 講義室

シンポジウム (15時~17時30分)

第1部門 (イギリス文学)

L101 講義室

第2部門 (アメリカ文学)

L102 講義室

第3部門 (英語学)

L202 講義室

懇親会 (19時00分~21時00分) (会費 6,000円 学生 4,000円)

10月15日(日)

研究発表 (①11時 ②11時40分)

第1室 (イギリス文学)

L203 講義室

第2室 (アメリカ文学)

L205 講義室

第3室 (英語学)

L306 講義室

特別講演 (13時30分)

L107 講義室

閉会式 (15時00分)

L107 講義室

受付

講義棟 1階ラウンジ・ホール

研究発表者・司会者・シンポジウム講師控室

L214 講義室

一般会員控室

L105 講義室

書籍展示会場

講義棟 1階ラウンジ・ホール

大会本部

L213 講義室

日本英文学会九州支部第76回大会プログラム

日 時：2023年10月14日（土）・15日（日）

場 所：宮崎大学木花キャンパス

第1日 10月14日（土）

（受付は正午より、講義棟1階ラウンジ・ホールにて行います。受付では年会費の納入はできません。）

開会式 13時10分より（L107 講義室）

開会の辞	司会・鹿児島県立短期大学教授	小林 朋子
開催校挨拶	支部長・鹿児島大学教授	竹内 勝徳
開催校案内	宮崎大学副学長	中林 健一
事務局報告	宮崎大学教授	井崎 浩
優秀論文賞等選考報告	事務局長・鹿児島大学教授	大和 高行
	編集委員長・福岡教育大学教授	後藤 美映

研究発表（①13時30分 ②14時10分）

第1室（L203 講義室）

1. John Donne の Songs and Sonnets における物語——愛の神との契約と代償
司会 津山工業高等専門学校准教授 山口 裕美
熊本県立大学大学院博士後期課程 鳥養 志乃

2. 「日記」という名の小説—*Nicholas Nickleby* に潜むモノについて
司会 九州大学教授 鶴飼 信光
(招待発表) 福岡大学准教授 渡部 智也

第2室（L205 講義室）

1. 人類以前と人類以後——『白鯨』第104章「化石鯨」における隔時性
司会 鹿児島大学教授 竹内 勝徳
(招待発表) 琉球大学准教授 小林 正臣

2. ソローのナチュラルヒストリー “Natural History in Massachusetts” を起点として
司会 北九州市立大学教授 齊藤 園子
九州大学名誉教授 高橋 勤

第3室（L306 講義室）

1. 移動現象における束縛代名詞効果とフェイズ境界
司会 九州共立大学准教授 黒木 隆善
九州大学大学院博士後期課程 白井 悠香

2. Form Copy と Relativized Minimality
司会 九州大学准教授 大塚 知昇
(招待発表) 九州大学准教授 前田 雅子

シンポジウム (15時～17時30分)

第1部門「イギリス文学」(L101 講義室)

西洋文学における愛とタブー——イギリス・ロマン派とポストモダンを中心に

司会・講師	九州国際大学	教授	池田	景子
講師	福岡教育大学	教授	後藤	美映
講師	大分工業高等専門学校	助教	野間	由梨花
講師	福岡大学	准教授	岩崎	雅之

第2部門「アメリカ文学」(L102 講義室)

19世紀アメリカ文学研究からケア倫理に応答する

司会・講師	長崎外国語大学	准教授	生田	和也
講師	福岡教育大学	教授	江頭	理江
講師	日本大学	准教授	内堀	奈保子
コメンテーター	上智大学	教授	小川	公代

第3部門「英語学」(L202 講義室)

認知言語学における捉え方・プロファイルの可能性を探る——他言語比較からみる英語の姿

司会・講師	熊本県立大学	教授	村尾	治彦
講師	大阪大学	准教授	田村	幸誠
講師	兵庫県立大学	准教授	木本	幸憲

懇親会 (19時00分～21時00分)

場所 MRTmicc (3F) (会費 6,000円 学生 4,000円)

第2日 10月15日(日)

(受付は、講義棟1階ラウンジ・ホールにて行います。受付では年会費の納入はできません。)

研究発表 (①11時 ②11時40分)

第1室 (L203 講義室)

- 司会 福岡工業大学教授 原田 寛子
1. オーランドーと Oak Tree——ヴァージニア・ウルフの *Orlando* における女性の創作の意義
九州大学大学院修士課程 伊瀬知 ひとみ

- 司会 福岡教育大学教授 後藤 美映
2. ロバート・バーンズの『シャンタのタム、(お話)』について——エドウィン・ミュアの言説をめぐって
(招待発表) 元帝京大学教授 木村 俊幸

第2室 (L205 講義室)

1. 【発表なし】

- 司会 福岡女子大学教授 長岡 真吾
2. Varieties of Strong Women in *The Birchbark House Series*
福岡大学大学院博士後期課程 Liu Hui

第3室 (L306 講義室)

- 司会 西南学院大学教授 谷川 晋一
1. Be 動詞句省略のラベリング分析
九州大学大学院博士後期課程 末永 広大

2. 日本語の wh-in-situ における介在効果

司会 長崎総合科学大学講師 永次 健人

九州大学大学院博士後期課程 久保田 舞

特別講演 13時30分より (L107 講義室)

札幌大学教授 時崎 久夫

「英語のリズムと形態統語論」

司会 福岡大学教授 山田 英二

閉会式 15時00分より (L107 講義室)

挨拶

支部長・鹿児島大学教授

竹内 勝徳

〈第1日〉10月14日(土)

研究発表

第1室(L203講義室)

司会 津山工業高等専門学校准教授 山口 裕美

1. John Donne の *Songs and Sonnets* における物語 ——愛の神との契約と代償

熊本県立大学大学院博士後期課程 鳥養 志乃

John Donne の *Songs and Sonnets* は現在掲載順序が確定していない詩群である。しかし本 *Songs and Sonnets* 研究ではこの詩群の作品同士が連想ゲームのように繋がっているという主張の元、ジャンル全体で円環を成す独自の順番を提示する。本発表では本 *Songs and Sonnets* 研究の一部として、“The Triple Fool”、“Farewell to Love”、“Love’s Usury”、“The Broken Heart”、“The Apparition”、“The Legacy”、“Love’s All”、“The Flea”、“The Ecstasy”、“The Dissolution”、“A Nocturnal upon St. Lucy’s Day”を扱う。そしてこれらの作品間について、Petrarch 的な恋愛詩を揶揄する語り手が、それらの恋愛詩で描かれる悲恋ばかりをさせる愛の神に一人の女性と愛し合うことになれば苦痛に耐えると約束を交わしたことで、Petrarch 的な恋愛詩の揶揄をしている中で本当に心から愛する女性と出会うことになるも、彼女が先に亡くなって世界の存在意義を見失うほどの喪失感を味わった上で、愛の神との契約を思い出す、という一連の物語を提示する。

司会 九州大学教授 鶴飼 信光

2. 「日記」という名の小説—*Nicholas Nickleby* に潜むモノについて

(招待発表) 福岡大学准教授 渡部 智也

1839年10月5日、晩餐会に出席したディケンズは、完成したばかりの自身の小説 *Nicholas Nickleby* についてスピーチを求められ、「同作は自分にとってここ2年の日記だった」と、「日記」(diary)という言葉を用いて自らの小説を表現している。この作品の主な執筆動機が、当時ヨークシャーに見られた、親に望まれない子供たちを集め、虐待する寄宿学校を批判することであり、作中に描かれるドゥザボーイズ・ホール及びスクウィアーズ校長が、ディケンズ自身が視察した学校とその校長の姿、有り様を映すものとして描かれたことを考えれば、本作は確かに彼の体験や思いがよく反映された作品と考えることはできる。しかしその一方で、「日記」という言葉からは、単に自分が見聞きした物事という以上に、「より個人的な何か」が存在することが感じられる。本発表では、特にこの学校で虐待された知的障害のある少年スマイクに焦点をあて、この日記という言葉に作家が込めた意味と意思の正体を考えたい。

第2室(L205講義室)

司会 鹿児島大学教授 竹内 勝徳

1. 人類以前と人類以後——『白鯨』第104章「化石鯨」における隔時性

(招待発表) 琉球大学准教授 小林 正臣

リヴァイアサン
巨鯨の化石を眼前として語り手イシュメールは思う——「おれは、[ノアの]大洪水によって、時間以前の驚異の世界へと押し流されていく。時間は人間の存在とともに始動したのだ」。その一方で、大洪水のはるか以前から生き続けている鯨を次のようにも思う——「時間の発生以前にすでに存在し、人

類の歴史が終焉してもなお存在するであろうはずのこの存在、鯨。このものを思うと言葉にならぬ戦慄が身内を駆け抜けるのに気づくのだ」。このように「驚異」と「戦慄」をもって語られる「鯨」は、人類以前と人類以後の歴史という隔時性を体現する存在である。そして隔時的な存在をめぐる考究は、イシュメールが追究する鯨学のように、科学的かつ哲学的——すなわち学際的——な様相を帯びることになる。事実、21世紀に登場した地質学や哲学等における外部性の探究は、人間の脱中心化に向けた隔時性の探究とも捉えられる。かくして「化石鯨」において提示される隔時性は、歴史や分野という時空を超えて思考するための起点となりえる。この多様な可能性を秘めた章に注目して、本発表ではイシュメールが驚きと慄きを覚える隔時性をどのように発展的に考えることができるのかを探りたい。

司会 北九州市立大学教授 齊藤 園子

2. ソローのナチュラルヒストリー “Natural History in Massachusetts” を起点として

九州大学名誉教授 高橋 勤

「マサチューセッツの自然史」は超絶主義者の機関誌 *The Dial* (1842年7月号) 誌上に発表されたソローの処女エッセイである。このエッセイは一篇のレビュー、もしくは自然史エッセイという枠組みをはるかに超えて、ソローの思想や創作姿勢、また科学をめぐる同時代性についてきわめて多くを物語っているように思われる。このエッセイの刊行が、ソローのその後の思想の展開と創作姿勢にどのような影響を与えたのか。またこれまで自然史をめぐるボストン周辺の時代背景については言及されることがなかったが、「マサチューセッツの自然史」の背景にどのような同時代性が隠されていたのか。ソローは当時の科学界と関係していたのか、それともしていなかったのか。どのような研究仲間やライバルがおり、どのようなネットワークのなかで動植物の知識を探求したのか。またフィールドでの観察や調査にどのような参考書を用い種の同定に役立てたのか。ソローには孤高のイメージがつきまとい、しばしば文明社会から逃れて自然観察に勤しんだという見方をされがちだが、実際にはソローのナチュラルヒストリーに対する関心や創作姿勢は同時代性によって大きく影響され、決定づけられていたのである。

第 3 室 (L306 講義室)

司会 九州共立大学准教授 黒木 隆善

1. 移動現象における束縛代名詞効果とフェイズ境界

九州大学大学院博士後期課程 臼井 悠香

Grano and Lasnik (2018)は、本来は節境界制限を示す移動現象が、埋め込み節の主語が束縛代名詞である場合には容認性が向上することを指摘し、束縛代名詞は随意的に値を持たない ϕ 素性を持って派生に導入され、当該CPにおいてTの ϕ 素性が照合されない場合、フェイズ性が無効となり、したがって長距離移動が可能になると論じている。この分析は、フェイズ性が命題性(propositionality)ではなく収束性(convergence)によって定義されうる可能性を示唆する点で優れている。一方で、vP フェイズを想定しないために、理論的齟齬が生じる可能性がある点、個別の分析までは踏み込めていない点などに、精緻化の余地があると考えられる。また、非定形節において顕在的な主語が現れる例や、束縛代名詞の先行詞が主節の目的語であるような例の分析に問題が残る。本発表では、束縛代名詞効果を示す現象を再検討し、Grano and Lasnik (2018)で提案された分析を、より理論的妥当性を高めたものへと修正することを目指す。

2. Form Copy と Relativized Minimality

(招待発表) 九州大学准教授 前田 雅子

Chomsky (2021)では、連鎖形成という操作を排除し、要素の同一性を派生の中で局所的に保証する Form Copy (FC)により保証した。しかし、Chomsky (2021)の FC の定義では、要素間の「構造的同一性」が何に基づいて保証されるかが明確ではないという理論的問題がある。また、自由併合の想定のもとでは、wh 移動などで見られる優位性効果を最小連結条件(Chomsky 1995)により説明することができない。さらに、移動の介在効果を示すのは同一素性を有する要素だけではない。例えば、(1)では、wh 付加詞 why の長距離移動が否定辞 not により阻害されている。(1) Why don't you think John left? (matrix/*embedded scope) Rizzi (2004)は、このような介在効果を示すのは、「数量」、「項」などの同一の素性クラスに属する要素であると主張し、素性に基づく相対的最小性 (Feature-based Relativized Minimality: FRM) を提案した。

本発表では、FC の「同一性」が素性クラスに基づく同一性に基づき適用されると仮定することで、FC が FRM に従うと主張する。その上で、優位性効果、基準凍結 (違反)、表示的 FRM と派生的 FRM の比較検討など、本提案が導く様々な示唆について考察する。

シンポジウム

第1部門「イギリス文学」(L101 講義室)

西洋文学における愛とタブー ——イギリス・ロマン派とポストモダンを中心に

司会・講師	九州国際大学教授	池田 景子
講師	福岡教育大学教授	後藤 美映
講師	大分工業高等専門学校助教	野間 由梨花
講師	福岡大学准教授	岩崎 雅之

世界最古とされる楔形文字が粘土板に刻んだのは愛の詩であり、古来より愛の名のもとに多くの文学が創造されてきた。同時に特定の愛の行為はタブーとして戒められ、例えば旧約聖書では姦淫、近親相姦、同性愛が禁忌とされている。一方で、聖書は姦淫・近親相姦の物語を複数含み、古代ギリシア人は同性愛にむしろ積極的な意味を見出していた。愛の情熱を伝える行為は、表現に違いはあれ、世界で普遍の語りだが、ある種の愛の行為は時代精神や社会の要請に応じて、戒められたり、禁忌が解かれたりしてきたのだ。愛の行為にまつわるタブーの既定に絶対性がないことに対して、英語圏文学はどのように反応し、どのような文学世界を構築しているだろうか。本シンポジウムでは、イギリス・ロマン派作家とポスト・モダニズム作家に焦点を当て、愛の表現にタブーの意識が関わるありようを検証することで、各作家の文学的メッセージ及び各作品の文学的価値を考察していく。

Mary Shelley の中編小説 *Matilda* における近親相姦

池田 景子

Mary Shelley の中編小説 *Matilda* (執筆年 1819-20) は処女作 *Frankenstein* (1818) に続く第二作目だが、扱うテーマは第一作目と大きく異なる。ゴシック小説の代表および SF 小説の原典のひとつと目される *Frankenstein* が科学者による人間創造の物語であるのに対して、本作品は父と娘の近親相姦をテーマとしている。イタリア滞在中に Mary はこの作品を執筆し、イギリスで出版してもらおうと原稿を父 William Godwin に送付する。しかし、Godwin は父と娘の近親相姦といったテーマに眉をひそめ、本作品の出版を禁じて生涯 Mary に原稿を返却することもなかった。本シンポジウムの考察では、Godwin の批判の矛先となった、本作品の後半部における主人公の描写にこそ Mary が近親相姦のテーマを通して示そうとした問題意識が隠されていると評価したい。父と娘の近親相姦のタブーに着眼し、Mary の *Matilda* で描かれる近親相姦の内実がどのようなものかを明らかにして、本作品の再評価を試みたい。

愛を語るというタブー

——Dante とロマン主義の詩における言葉を語ることの意義

後藤 美映

Dante の『神曲』の地獄篇には、絶唱の一つとして有名な Francesca と Paolo の愛の物語が挿入されており、「愛が私ども二人を一つの死に導いた」と Francesca によって歌われる愛は、密通した不義として断罪されている。この不義の物語は、ロマン主義の時代に、Hunt、Keats、Byron らによって、宗教的倫理よりも愛の情熱を謳歌する物語として改作され翻訳される。しかし、興味深いことに、地獄篇の Francesca の語りでは、Paolo の名前は言及されず、しかも二人の不義の行為は Lancelot の物語に委ねられたまま具体的に語られることはない。したがって本発表では、この Francesca の語り、ロマン派の詩人らによって禁忌を解かれ、どのように代弁されるかを通して、ロマン主義における言葉を語ることの意義と、そこから派生する美学的、社会的改革の試みについて考察する。

Frankenstein の怪物が求める愛の形

野間 由梨花

Frankenstein; Or, the Modern Prometheus (1818)において、Frankenstein の犯したタブーは人間による人類の創造であろう。*Frankenstein* におけるタブーに焦点を絞れば、科学と倫理の問題が指摘できることは明白である。しかし、愛の問題はより複雑なものではないだろうか。例えば、Frankenstein と怪物の関係を旧約聖書の創世記と比較すると、神は人間を作り、Adam と名付け、さらに「人が一人でいるのは良くない」として Eve を与える。しかし、*Frankenstein* の怪物は名付けられることもなく創造主に見放され、女の怪物さえも破壊されてしまう。愛されることもない怪物は、愛する対象すら与えられないのだ。果たして Frankenstein の罪は人類の創造だけなのだろうか。本シンポジウムでは、*Frankenstein* を愛とタブーの観点から再検討し、作中に表象される Mary Shelley の愛に対するイデオロギーを探りたい。

現代英語圏文学におけるバイオフィクション ——E. M. Forster とその作品を中心として

岩崎 雅之

現代作家によるモダニズムの遺産継承において、実在したモダニストを登場させるバイオフィクションの実態解明にはまだ十分に議論の余地がある。このジャンルにおける E. M. Forster の果たす役割は大きい。例えば、*Howards End* (1910) を下敷きにした Matthew Lopez の劇作品 *The Inheritance* (2018) では、Forster は登場人物の一人 (Morgan) として登場し、彼の著した *Maurice* (1971) が主要登場人物たちの自己実現を介助する。また、William di Canzio の *Maurice* の翻案 *Alec* (2021) でも、Forster は Morgan として登場し、主人公 Alec の自己形成を導く。ここで留意しておきたいのは、Forster は生前、その同性愛的テーマのために *Maurice* の出版を諦めたという事実である。本発表では、バイオフィクションの定義を拡張し、愛とタブーの観点からモダニズム作品の継承をある種の象徴的行為として読み解くことで、そこにどのような現代的意義を認めることができるのかを論じたい。

第2部門「アメリカ文学」(L102 講義室)

19世紀アメリカ文学研究からケア倫理に応答する

司会・講師	長崎外国語大学	准教授	生田 和也
講師	福岡教育大学	教授	江頭 理江
講師	日本大学	准教授	内堀 奈保子
コメンテーター	上智大学	教授	小川 公代

理性的かつ自律的な「リベラルな主体」が社会の中心と想定されてきた 19 世紀のアメリカ合衆国にあって、同時代の文学作品には相互依存的で可傷性を持つ「傷つきやすい主体」が多数登場する。19 世紀アメリカの可傷性の文学的表象から、現代において社会的要請が高まる「ケア倫理」への思考回路を探ることが、このシンポジウムの目的である。

特に本シンポジウムでは、『ケアの倫理とエンパワメント』(2021) および『ケアする惑星』(2023) の著者である小川公代氏をお招きし、ケア倫理に基づく文学／文化批評の趣旨についてお話をいただく。その後、2022 年に新訳版が刊行されたキャロル・ギリガン氏の『もうひとつの声で——心理学の理論とケアの倫理』や小川氏の著書の内容をふまえ、3 名の発表者が 19 世紀アメリカの文学的想像力から「ケア倫理」への応答を試みる。発表後には登壇者間での意見交換やフロアとの質疑応答を予定しており、会場にて多くの議論が交わされることを期待している。

看護師ウォルト・ホイットマン

生田 和也

かつて批評家 F.O マシーセンが 19 世紀中盤のアメリカ合衆国の時代精神を色濃く反映する作家としてラルフ・ウォルドー・エマソンとウォルト・ホイットマンを挙げ、民主主義とロマン主義が結合した彼らの時代を「アメリカン・ルネッサンス」と名付けたことはよく知られている。自立した個人が賛美されたこのリベラルな時代において、ホイットマンが詩作や日記で見せた他者依存や他者配慮の場面を取り上げ、現代のケア倫理の観点からこの詩人を再評価することが本発表の目的である。

その際に本発表は、小川公代氏のケア批評への応答であると同時に、日本英文学会九州支部第 75 回大会 (2022) のシンポジウム「戦争に周縁はあるのか？」で繰り広げられた議論に応答することも意図している。特にアメリカ南北戦争に兵士ではなく看護師として参戦したホイットマンの姿に注目し、彼の看護実践の記録を糸口にホイットマン作品のケア倫理を読み解いてみたい。

「黄色い壁紙」から逆転と矛盾の様相を読み解く

江頭 理江

シャーロット・パーキンス・ギルマンは、19世紀末に女性の権利拡張を訴えた文筆家である。ギルマンは、出産後の憂鬱症に陥った女性が、屋根裏部屋に閉じ込められ狂気に陥る様子を、女性自身の声で語らせる。夫は彼女を愛し、自分こそが彼女を病から救い出せると言う。妻も夫を愛していると言うが、最後には錯乱状態に陥る。

小川氏が触れる、ウルフが強調している「他人の感情に流されたり、家庭で子どもをケアする力を発揮したりする男性を『女々しい』と決めつけてきた性規範から解放される未来」は、妻を愛し、献身的にケアしていると見える夫の姿の中に、既にも実現されていると言えるのか？ 妻はと言えば、夫のケアを心の中で否定し、月夜に壁紙の中で這いつくばる女の姿に自らを見て、彼女たちを解放するために壁紙を破り続ける。ケアする者とされる者における、ある種の逆転と矛盾の様相が見える。当時のアメリカの社会状況・社会規範の上に立って作品を読み、結果としてケアに関する現代の事象を考える何らかのヒントを見出すことを試みる。

ギリガンの『緋文字』論から「ケアの倫理」を考える

内堀 奈保子

ナサニエル・ホーソーンの名作『緋文字』は、1850年に出版されてから2世紀以上もの長きに渡り熱心に読まれ続けているが、「ケアの倫理」の生みの親であるキャロル・ギリガンもそのリストに連なっていることは、ほとんど注目されてこなかった。しかし、ギリガンは、1982年に「ケアの倫理」の嚆矢とされる『もう一つの声で——心理学の理論とケアの倫理』を出版以降、『快樂の誕生』(2003)や『抵抗に加担する』(2010)といった著述の中で、幾度も『緋文字』を取り上げ、分析を行っている。さらに、2002年には、『緋文字』の翻案を創作、舞台化し、2009年には、息子のジョナサンと共に、ヘスターの不義の子パールを中心に据えたオペラ翻案『パール』(PEARL)を創作、上演している。ギリガンは『緋文字』をどう読んでいるのか。また、『もう一つの声で』から40年後に生きる我々にとって、彼女の読みはどのように発展しうるのか。本発表では、ギリガンの『緋文字』分析をスプリングボードにして、「ケアの倫理」について論じてみたい。

第3部門「英語学」(L202 講義室)

認知言語学における捉え方・プロファイルの可能性を探る ——他言語比較からみる英語の姿

司会・講師 熊本県立大学教授 村尾 治彦
講師 大阪大学准教授 田村 幸誠
講師 兵庫県立大学准教授 木本 幸憲

プロファイル (Langacker 1987, 1991, 2008) などのプロミネンスをはじめとして認知的捉え方 (construal) の反映のされ方によって個別言語の表現が決定される。同一状況であってもその捉え方の違いによって異なる表現の選択がなされるわけである。このことは言語間における表現形式の違いにも反映され、類似した言語現象において、同一の状況のどこに視点を置くか、際立ちを与えるかなど、どのように捉えるか (construal) の差異が当該言語現象の振る舞いに影響する (Langacker 1987, 1991, 2008, Talmy 2000 など)。認知言語学ではこのような考え方によってこれまで多くの言語現象が説明されてきたが、本シンポジウムでは、改めてプロミネンスという概念に焦点を当て、言語間の差異への反映を考察の軸としつつ、その意義、有効性を問う。特に、英語を日本語などの他言語と比較しつつ、

プロフィールなどの観点から、音韻、意味、文法現象などにみられる英語という言語の姿を捉えることをこころみる。

構文ネットワークにおける日英語の増減表現とプロフィール

村尾 治彦

日英語の好まれる表現パターンの違いの中で、日本語が動詞志向、英語が名詞志向、あるいはコトとモノの対立ということはよく指摘されている（池上 1981、安藤 1986、吉川 1995、野村 2014 など）が、本発表では、**increased/ decreased +NP**、「～が増える・減る」などの日英語の増減表現においてその傾向を検証し、それぞれの概念化過程での抽象度やプロフィール（Langacker 1987, 1991, 2008）の違いから考察を行う。また、**more, less** などの比較を表す表現パターンや単純な形容詞＋名詞の表現を含めて日本語の動詞表現の概念化パターンと英語の「修飾表現＋名詞」の概念化パターンがどの範囲まで広がっているか確認する。そのうえで、この両言語の違いは構文ネットワーク内で活性化されるレベルの違いとしてあらわれることを主張する。これによって、その言語で好まれる表現パターンの違い（cf. 池上 1981, 2011, Hinds 1986, 本多 2005 など）を、ネットワーク内で、使用頻度が高く、より活性化しているノードの構文と、文法的であるが、活性度の低いノードの構文の区別としてとらえなおす。

プロフィールからみた文法化（grammaticization）と音韻化（phonologization）

田村 幸誠

認知言語学で提唱されている言語を分析する際に用いられる様々な原理は、一般認知能力に根ざすドメイン中立的なものであるとされる（Langacker 2008）。しかし、この 40 年にわたる研究の大半が意味（意味極）に関するもので、記号的文法観の中で同じく概念表示されると仮定されるもう一つの軸、音韻極に関しては実質的な議論がなされてこなかった。一方、音韻論者の Hyman（1976, 1984, 2013）は、Givón（1971, 1979）で展開されている語用論と統語論の関係に関する研究を参考に文法化と音韻化の類似性を指摘し、その上で、文法化と音韻化は文法的には実質的に同じ機能を果たしているが、この両者を束ねる概念がないと述べている。本発表では、その文法機能はまさに認知言語学の重要概念であるプロフィールではないかという提案を行う。プロフィールという基本概念をあらためて精査しながら（Wang and Fillmore 1961; Fillmore 1982）、Hyman の音韻研究は認知言語学においてほぼ未開拓の音韻極の研究を今後進めていく上での重要な視座を与えてくれることを主に、英語の特徴を日本語やユピック語の例と比較しながら議論を行う。

have 言語としての英語、be 言語としての日本語の 2 項対立を超えて 認知文法の「捉え方」と言語類型論

木本 幸憲

所有概念を言語化する際、伝統的に英語は **have** 型の言語であり、日本語は **be** 型の言語であると述べられてきた（池上 1981, 1982, Hinds 1986, 上山 2009 ほか）。本発表では、言語類型論的観点から、そのような日英比較による 2 項対立な観点を相対化し、また所有構文の多様性を存在・所有のイメージの拡張の度合いの差によって整理する。世界の言語と比較した場合、日本語は、「私は赤い車を持っている」「彼女は細い腕をしている」など「持つ、する」という他動詞が存在する点など、日本語は純然たる **be** 言語とは言えない。これは、**exist** 動詞のみでしか所有を表せない北部フィリピンの言語などとは対

照的である。また英語においても、**have** は存在表現までは十分に拡張しておらず、フランス語、ドイツ語スイス方言、中国語と比べると、**have** 型の傾向は低いと言える。このような構文の多様性は、言語が話者に課す捉え方の違いであり、存在ないし所有のイメージがどの程度言語によって比喩的に拡張できるかの違いである (Langacker 1976, 1990, 1999, 2009)。本発表では、存在・所有のイメージないし捉え方が拡張される意味領域の差によって、英語と日本語の所有構文が相対的に位置付けられることを述べる。

〈第2日〉10月15日(日)
研究発表

第1室(L203講義室)

司会 福岡工業大学教授 原田 寛子

1. オーランドーと Oak Tree

——ヴァージニア・ウルフの *Orlando* における女性の創作の意義

九州大学大学院修士課程 伊瀬知 ひとみ

ヴァージニア・ウルフの *Orlando: A Biography* (1928) は、主人公オーランドーが400年を生き、その途中で男性から女性に性転換する物語である。先行研究では、本作は性別や時代を超越する内容からファンタジーやパロディとして捉えられ、近年では、オーランドーの衣服と性別超越の表象に着目してクィア理論に基づいた両性具有的解釈が行われている。本発表ではオーランドーの詩作に焦点を当て、作品中の Oak Tree の表象を分析し、その上で女性の創作の意義の観点から作品を読み直すことを試みる。本作はウルフの他作品と異なりファンタジー色が強く、副題 *A Biography* を一見すると、伝記という名を借りたパロディであると言える。しかし単純にパロディだと決めてしまうと、本作が内包する女性と文学の結びつきが軽視されてしまう。ウルフの一連の作品と同様に、文学史における女性のこれまでの苦難やペンの力の可能性を、ウルフは大胆なプロットを用いて本作でも鮮やかに描き出そうとしたと結論づけられる。それにより、本作が単なるファンタジー物語ではなく、女性の創作の意義を読者に伝える重要な作品として再評価できるのである。

司会 福岡教育大学教授 後藤 美映

2. ロバート・バーンズの『シャンタのタム、(お話)』について

——エドウィン・ミュアの言説をめぐって

(招待発表) 元帝京大学教授 木村 俊幸

スコットランド、オークニー諸島出身の詩人エドウィン・ミュアは、一言語としてのスコッツ語の不完全性を示す例証として、バーンズの『シャンタのタム、(お話)』の、「歓楽は満開の罌粟の花にも似て……」から始まる一節がそれまでのスコッツ語の記述から突如純粋な英語の記述に切り替わっている事実を挙げている。ミュアは、この英語への転換の理由を、スコッツ語は思想 (thought) のための言語ではなく感情 (sentiment) のための言語であるため、上記の一節に盛られた *Carpe Diem* (Seize the day) という思想 (thought) をバーンズが母語であるスコッツ語で表現する術を持たなかったことに置いている。

本発表の目的は、ミュアの言説を批判的に検討しつつ、『シャンタのタム、(お話)』がスコットランド口語・世俗詩の伝統に拠りながら、その地域的特殊性を超えた、ある種の普遍性に達していることを示唆することにある。ミュアの目にスコッツ語の不完全さの証として映じた上記の一節こそ、『シャ

ンタのタム、(お話)』に普遍の輝きを付与し、この作品を不朽の名作たらしめている要素であることを立証したい。

第 2 室 (L205 講義室)

1. 【発表なし】

司会 福岡女子大学教授 長岡 真吾

2. Varieties of Strong Women in *The Birchbark House* Series

福岡大学大学院博士後期課程 Liu Hui

Native American author Louise Erdrich has been writing for children her *Birchbark House* series, including *The Birchbark House* (1999), *The Game of Silence* (2005), *The Porcupine Year* (2008), *Chickadee* (2012), and *Makoons* (2016). In the series, Erdrich gives us a full look at nineteenth-century Native American daily life, culture, and myths.

Erdrich understands the complexity of human nature and American culture, including Native American culture, which means that she does not write characters who are all strong or all weak in the same way. In my presentation, then, I'm going to explain the varieties of strong women in *The Birchbark House* series.

My analysis of strong women in *The Birchbark House* series reveals the appreciation of women's power and strength in Native American and American culture, as well as the acceptance of having an "unusual" personality.

第 3 室 (L306 講義室)

司会 西南学院大学教授 谷川 晋一

1. *Be* 動詞句省略のラベリング分析

九州大学大学院博士後期課程 末永 広大

本発表の目的は、Chomsky (2013, 2015)におけるラベル理論の観点から省略現象を説明する Takaki (2017)の想定を援用し、英語における(コピュラ)*Be* 動詞句の省略文の分析を行うことである。

以下の(1)における省略文が示すように、(一般)動詞句の省略 (Verb Phrase Ellipsis: VPE)とは異なり、(コピュラ)*Be* 動詞句の省略(Copula Phrase Ellipsis: CoPE)では、*be* 動詞の省略が随意的である。

- (1) a. John will be there, and Mary will (be), too.
b. John will go there, and Mary will (*go), too.

このような随意性を説明するために、これまでの先行研究では、*be*-shift (Akmajian and Wasow (1975), Sato (2013))や Bare Predicate Ellipsis (Merchant (2015), Park (2017))、カートグラフィーに基づく *be*-raising (Aelbrecht and Harwood (2015))など、様々な分析が提示されている。

本発表では、一般動詞句とは異なり、*be* 動詞句の派生では Reverse Pair-Merge が行われると提案することで、上記のような分析に頼ることなく、ラベル理論の観点から、(1)の省略文に見られる随意性の対比を再考・検討していく。

2. 日本語の wh-in-situ における介在効果

九州大学大学院博士後期課程 久保田 舞

日本語の in-situ wh の解釈はスコープ要素や一部の数量詞による介在効果を受けることが広く観察されてきた。一方、英語の wh 移動や日本語の wh 句のかき混ぜは介在効果の影響を受けない。これらの事実から介在効果は一般的に非顕在的な移動のみを妨げるように思われる。

本発表では従来 LF 移動を標的とした障壁効果であると議論されてきた介在効果について、フェイズ理論の枠組みのもと、LF 部門・LF 規則を用いない説明づけを試みる。具体的には、ドイツ語の separation construction において顕在的な wh 要素の移動が介在効果を受けること、また日本語においても同様の現象が観察されることから、日本語の wh 句は $[_{DP} [_{QP} wh] [_{NP} \quad]]$ のような階層的な DP 構造を持つと想定する。日本語の wh-in-situ では wh 句の解釈のために QP のみが移動し、この移動は介在効果を受けると議論する。更に、英語の wh 移動や日本語のかき混ぜの場合 DP 全体が移動しており、この移動が Collins (2005)の密輸(smuggling)の効果をもたらすため、介在効果が回避されると主張する。

特別講演 (L107 講義室)

司会 福岡大学教授 山田 英二

演題 英語のリズムと形態統語論

講師 札幌大学教授 時崎 久夫 (ときざき ひさお)

講演内容

言語の音韻・形態・統語の特徴は相互に関係していることを、英語を中心に考えたい。英語は(弱・)強・弱のリズムを持ち、それが句における主要部先行語順と(複合)語における主要部後行語順を決め、複合語の生産性や反復可能性、詩における頭韻と脚韻、歌の弱起・強起につながることを述べる。また、日本語・コリア語・ドイツ語・中国語などの強勢パターンを詳しく観察することで、リズムと語順や形態統語論が世界の言語で関連しているという考えを示す。

チョムスキーによるミニマリスト・プログラムでは、計算部門は普遍的であり、世界の言語の様々な差異は、外在化によるものと考えている。本講演の考えは、これに合うものであり、外在化におけるリズムの差異が語順や形態統語論の差異を生むことになる。それと同時に、部門間の相関により、可能な言語の種類を制限し、子供が短期間で母国語を習得するという事実の説明を与えることができると思われる。

講師紹介

1959年千葉県四街道市生まれ。北海道大学大学院博士後期課程単位取得退学、博士(言語学)(筑波大学)。北海道大学文学部助手、札幌大学外国語学部講師、助教授を経て現在、札幌大学地域共創学群教授。1998-1999年マサチューセッツ大学アマースト校、2012-2013年マサチューセッツ工科大学客員研究員。日本英語学会大会運営委員長、編集委員、現在日本音韻論学会会長。

著書：*Syntactic structure and silence: A minimalist theory of syntax-phonology interface*. Hituzi Syobo (2008), 『音韻論と他の部門とのインターフェイス』開拓社(共著 2022)。

主な論文：“Prosodic phrasing and bare phrase structure,” *NELS* 29 (1999), “The nature of linear information in the morphosyntax-PF interface,” *English Linguistics* 28 (2011), “Deriving the Compounding Parameter from Phonology,” *Linguistic Analysis* 38 (2013), “A Stress-Based Theory of Disharmonic Word Orders,” T. Biberauer and M. Sheehan (eds.) *Theoretical approaches to disharmonic word orders*, Oxford University Press (共著 2013), “Word stress, pitch accent and word order typology with special reference to Altaic,” R. Goedemans, et al. (eds.) *The study of word stress and accent: Theories, methods and data*, Cambridge University Press (2019).